



Ultimate Hunter-1

Original Story ザウス(本醸造)

Novelization 糸井健一

Original Illustration まさはる

プロローグ

7

第1章 アレク草原

23

第2章 ゲイル山脈

59

第3章 ジェノム山

103

第4章 カーニバル

147

第5章 丘の上の死闘

197



プロローグ

どこまでも青い空に舞う、深紅の王者……。

それは巨大な鳥にも見え、炎の固まりのようにも見えた。

それだけが、幼かった頃の唯一の記憶。

ただ地上で見上げることしかできない俺に、何かを伝えるかのように大声で嘶いた彼は、俺の頭上で大きく旋回した後、その大きな翼を悠然と羽ばたかせて一直線に彼方を目指して旅立っていった。

どこまでも雄々しく、そして力強く……。

『窮屈じゃないか？ 退屈じゃないか？』

言葉は分からないが、彼はたしかにそう言ったのだと、俺は確信を持っている。

ほんの少しの羨望と、身を焦がす程の憧憬。

それは、希望の旅に赴く者へと向ける眼差し。

俺もいつか……。

彼が目指している場所へと、歩き出すことができるのだろうか。

想いを、羽ばたかせる事ができるのだろうか。

夢を、叶えることが……………。

俺もいつか……………。

「くっ……」

風が吹いていた……。

心地良い青葉の薫りに心を落ち着かせ、時折強く流れる潮風に心を踊らせる。

「ああ、や……いやあ。くう……あう……っ！」

氷のような冷静さと、炎のような激情。

まったく矛盾したこの感情を制御できてこそこの「アルティメットハンター」だ。

そう、まさにこの風は俺に相応^{ふさわ}しい。

「ち、違う……感じてなんか、いないんだっ………から！」

俺に相応しくないものは、平穏と怠惰なのだ。

だから、いつでも新しい刺激を求める。

「あんたなんかに、あんたなんかに……っっ!!」

今、この場で俺に陥落されようとしている『自称』パートナーのような……。

「どうしたエレナ？ まさか、もうへばったのか？」

「そ……そんな、ハズ。ないじゃない……ンッ！」

貿易都市『ザール』を見おろす小高い丘に、勝ち気そうな少女の切なげな声が響き渡る。声の主、そう、自称パートナーのエレナは、服は着ているものの、胸はだけさせられ、スカートは大きく捲り上げられており、俺の前に無抵抗な姿をさらしていた。

エレナが一番敏感な所は、既に俺の分身によって荒々しく蹂躪じゅうりょんされている。内股を伝わる水滴の感触が、彼女の本心をなによりも物語っていた。

「いいのか、そんな大声を出して。誰か来るかも知れないぞ。もつとも、俺はそれでも構わないが……」

「いや……だ！ 声なんて出して……ないわ……よ！」

立木に両手でしがみついたエレナは、紅く、長い髪を振り乱しながら、必死になって襲ってくる快感に抵抗する。

だが、それは無駄な抵抗だ。この俺にかかれば、すべての女性は虜とりこになるしかないのだ!! 「違ちがうつたら……はあ……あ、あんだとは、仕事上のパートナーであつて……こ、こんな……」

うくっ！」

後ろから激しく突かれる度に、エレナは自身を縛る理性から解放される。

「こーんなに濡らしておいて？」

「やっ……」

その一言がエレナの羞恥心に火を点けたのか、紅潮した肌にますます赤味がさし、アソコに伝わる体温が熱くなる。

あと一息か……。

俺はエレナの腰を強引に引き寄せ、より深く、内壁を擦るように何度も突き刺す。

「うあっ……ああっ！ 奥に……当たる……も、もういやあ……」

「ホントは俺とこうなりたかつたんだろ？」

下を向いているにも関わらずあまり形の変わらない乳房を、少々乱暴に揉みしだく。淡い色の先端は、先ほどから痛々しい程に勃ちつばなしだ。

まあ、もうちょつと豊かな方が俺の好みだが……この手のひらに丁度収まるサイズってのもまた捨てがたい。

「ううん、うくっ……だ、だって……。あたし、そんなに魅力ないんだもん……。今だって……あたしの胸が小さいって……思ってるでしょ？」

涙声の混じったエレナの小さなつぶやき。その消え入りそうな声の弱さが、むしろ押し殺した感情の大きさを物語っている。

しかし女の勘は、侮りがたい……。

「だから……んふっ！ く、ふわあ！ あンツツ!!」

「俺が拒むと思ったのか？ 案外臆病なんだな？」

俺は腰の動きを止めると、背後からエレナの身体を抱きしめ、耳元に口を寄せてそっと囁く。

「あ……」

「俺は、そういう控え目なお前が好きなのさ」

「え……ホント……あはっ!!」

もちろん、その際に耳への愛撫も欠かさない。エレナがひるんだ隙に身体を離し、再び奥を突くようなグラインドを再開させる。

素晴らしい、我ながら完璧なコンボだ!!

「今まで俺がお前に嘘を言った事があるか？」

「はああっ！ ……信じてもいいの？ あたし、あなたのコト……？」

「ああ。愛してるぜ、エレナ」

「嬉しい……っ！ あたしも、ずっと好きだった。だから、いつもこうしてもらいたいって思ってた……ンあっ」

「ああ、今までの分、まとめて愛してやるぜ」

「ああっ！ 好きよ、好き……愛して欲しいのっ」

堕ちた……もはやエレナは骨のズイまで、俺の虜だ!!

「んくうう……ふうう……あ、あなたの熱いので、あたしを奥まで貫いてえ!」

「ああ、お前に最高の快楽を与えてやる!」

背後からエレナの左腕を掴み、上半身を引っ張り上げると共に、渾身の力を込めてラストパートをかける。

「あ、あっっ!! 凄い……凄いよ……。一番奥まで届いて、あたしのを叩いてる……っ!」

エレナの中がきつく締まる。さすがに俺もそろそろ限界に近い……が!

「まだまだあ!」

「ダメ……ダメよ。そんなにされたら、あたし……いっちゃいそう……まだ、愛して欲しいのに!」

「そのままイッちまえエレナ! これから何度でもしてやるから!!」

「嬉しい……ホントよ? あたしが倒れるまで、ずっと」



「ああ！」

「ステキっ！ やっぱりあなたはあたしの見込んだ男だわ。お、お願い、いく時は、あたしのナカでイって……ね？ あなたの熱い液を、あたしのナカに注ぎ込んでっ！」

言われなくても、もう限界だ。だがまだ最後の仕上げがすんでいない。俺はエレナの尻に腰を押しつけて動きを止め、熱い射出感をギリギリの所で制御する。

「ああんっ、な、なんで止めるの？ お願い、動いて……」

「違うだろ、エレナ。お願いをする時は、そんな言葉じゃないはずだ」

「えっ？」

俺の望む言葉をエレナは分かっているはずだ。彼女の口からその言葉を言わせてこそ、完璧な屈服になるのだ。

だが、彼女の最後に残った一欠片ひとかけらの理性が、その言葉を喉で詰まらせる。

「あ、あたしは……あなたの……」

「俺の……なんだ、エレナ。言わなきゃここで終わりだぞ」

「いやあそんなの……。ど……」

「ど？」

エレナの瞳から大粒の涙が零れる。涙の一粒は、崩れた理性の欠片だ。

さあ言え、エレナ……言って楽になっちまえ!!

「ど、奴隷になりたいの! いつでも、どこでも……ここに欲望を吐き出して欲しいのっ!!」
決壊したダムのように、エレナは一気に言葉を吐き出す。

「ふっ、ふはははは……っ! 可愛いぞ、エレナ!!」

心の中の笑い声が、口から漏れて止まらない。

いや、もう心に留めておく必要などないのだ!

エレナはもう、俺にかしづく奴隷なのだから!!

「はーっはっはっはっ! やあっと俺さまの素晴らしさがわかったか! この、世界最高(予定)のアルティメットハンターたる俺さまのつつ!! そうだ! もっと俺にかしづくがいいぞ、エレナあああああああぎややややややややああああ!!」

お、俺様の大事なジュニアに激しい痛みがあ!

エレナ!! お前の下の口は本当の口か?

歯が生え揃っているのか!?

「だあゝれえゝがあゝあゝんゝなあゝがあゝきいゝでえゝすつてえゝ」